

石神中学校だより

第14号

発行日：平成31年3月18日（月）



【教育目標】

- ・自ら学習する生徒
- ・正しく判断できる生徒
- ・健やかな生徒

発行者 校長 高橋知宏

石神中学校第72回卒業式に寄せて

3月13日（水）、第72回石神中学校卒業証書授与式が挙行され、75名の卒業生が本校を巣立ちました。石神中生としての自信と誇りを持ち、学習や行事、部活動等にいかに取り組むべきかを行動で示してくれた卒業生であったと思います。



＜卒業証書授与＞

（卒業式式辞抜粋） 75名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。石神中学校は、昭和22年、石神村立石神中学校として開校以来、70有余年、その伝統は脈々と受け継がれ、卒業生11,000名を数える歴史ある中学校です。そして、皆さんは、「平成の時代最後の卒業生」となります。この石神中学校で学んだ3年間はどうでしたか。皆さんとの関わりの中で、とりわけ印象に残っているのは、修学旅行と文化祭です。

待ちに待った東京都内班別自主研修とディズニーリゾートでの自由行動がある修学旅行2日目、この日のために皆さんは2年生のうちから、細かく行動計画を立てて準備を進めてきました。しかし、当日の朝、私達は叩きつけるような雨の音で目を覚ました。皆さんは大雨の中、ずぶ濡れになりながらも、

慣れない東京都内での自主研修を力を合わせてやり遂げました。すると研修終了地点の舞浜駅ではそれまでの大雨が、嘘のように晴れわたり、夏のような日差しのもと、ディズニーランドとディズニーシーでの活動がスタートしました。それは、降りしきる雨の中、頑張った皆さんへのご褒美だったのでしょうか。しかし、翌日の最終日は、山場を乗り越えた安堵感からか、早朝から、忘れ物や集合時間への遅れなどが次々に発生しました。その日予定されている浅草仲見世や東京スカイツリーでの自由散策、月島でのもんじや焼き体験を予定通りに終えて、無事に上野駅15時06分発東北新幹線のぞみ143号に皆さんを乗せて石神中に帰れるのだろうかと不安が頭をよぎりましたが、自由散策をしても、必ず時間通りに新幹線に乗れるようにするために、学年全員で考えを出し合い、まとめ、確かめ合い、心を一つにして難局を乗り越えました。東京下町での活動を予定通りやり終えた皆さんの姿は本当に輝いて見えました。

文化祭では、修学旅行をはじめ、日頃の授業や部活動、様々な体験活動を通して学んだことを下敷きにしながら、東日本大震災当時、小学校一年生だった皆さんが、これまでどのような道筋をたどり、その時に何を考え、今何を思うのか、そしてこれからどう生きていくべきなのか、仲間と共に本音をぶつけ合いながら、探し求めようとしている自分たちの姿を構成劇にまとめあげ発表しました。皆さんのこれまでにない全く新しい取組は、石神中学校文化祭の歴史に新しい1ページを記すことになりました。

今、日本は2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、様々な分野で活気づき、社会全体に明るさが見え始めていますが、私達のふるさとはあの震災から8年が経過しても尚、復興は道半ばです。また、これからは少子高齢化の進行やグローバル化に伴う国際競争の激化、AI・人口知能の台頭により今存在する職業の半数が存続できないという予測など、先が全く予期できない、激動する時代です。そのような時代を生き抜くために求められる力は、まさに修学旅行や文化祭で皆さんが發揮した様々な人々と協力しながら、主体性を持って人生を切り拓いていく力、どんな状況でも自分で考えて問題を解決していく人間力です。この石神中学校での3年間の学びで身に付けた力の上にさらにこれから的新しい世界での学びを通して知識と経験を積み重ね、心豊かにたくましく成長していくことを願ってやみません。

「いちばん大切なことは、目に見えない」これは、フランスの作家サンニテグジュベリの書いた『星の王子さま』の一節に出てくる言葉です。「難しい課題に挑み解決できたときの喜び」「仲間と協力してやりきった合唱コンクールでの充実感」「いつも見守り支えてくれた先生方」そして何より「今まで育ててくださったお家の方々の愛情やご苦労」…現代社会に生きる私達は、目に見えるものばかりに心を奪われてしまいがちですが、よく考えてみると、目に見えない多くのものに支えられていることに気付きます。時には立ち止まり、「本当に大切なもの」をじっくり考えてください。目先のことだけにとらわれず、自分の頭で考え、心で感じ、ものごとの本質・真実を見定めていってください。



＜在校生代表送辞＞
遠藤陽菜さん



＜卒業生代表答辞＞
森洋斗士君